



大井・西尾地区農道整備関係遺跡発掘調査概要報告書



1996年3月

松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

例 言

1. 本書は、平成5年度から平成7年度にかけて財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した、大井・西尾地区農道整備関係遺跡発掘調査（岩汐峠遺跡・米坂遺跡・運倉横穴墓群）の概要報告書です。
2. 本書で概要を報告する3遺跡の発掘調査は、島根県松江農林振興センターから松江市教育委員会が依頼を受け、財団法人松江市教育文化振興事業団が委託を受けて実施したものです。
3. 調査の組織は下記のとおりです。

依頼者 島根県松江農林振興センター 農村整備部 農地整備課

主体者 松江市教育委員会

事務局 教 育 長 諏訪 秀富

生涯学習部長 中西 宏次（平成5年6月～平成7年3月）

伊藤 博之（平成7年4月～）

文化課長 村松 榮（平成5年6月～平成6年3月）

中林 俊（平成6年4月～平成7年6月）

柳原 知朗（平成7年7月～）

文化財係長 岡崎雄二郎

実施者 財団法人松江市教育文化振興事業団

理事長 吉岡 俊雄（～平成7年3月）

大塚 雄史（平成7年4月～）

事務局長 日高 稔夫（～平成6年3月）

佐藤千代光（平成6年4月～）

調査係長 中尾 秀信

調査者 調査員 江川 幸子

調査補助員 伊藤 巖（～平成6年3月）

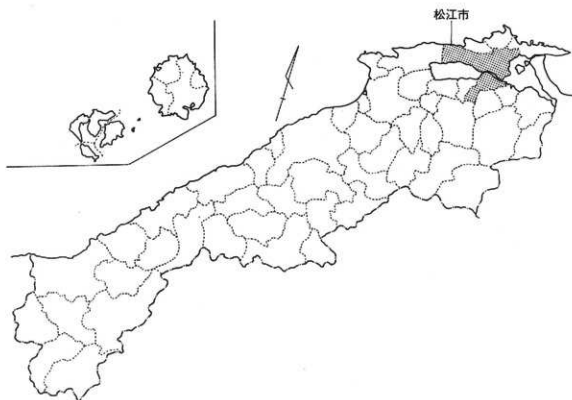
井上 修一（平成6年4月～平成6年6月）

宮本亜希子（平成6年9月～）

4. 調査の実施にあたっては、多数の方々からご指導・ご協力をいただきました。感謝いたします。なお、具体的な氏名・内容等については本概要報告書では省略させていただきます。
5. 大井・西尾地区農道整備関係遺跡発掘調査は、あと2遺跡（米坂古墳群・柴尾遺跡）について調査を実施する計画があります。発掘調査がすべて完了した時点で、本書で概要を報告した3遺跡、および松江市教育委員会が調査を実施した4遺跡を含めた詳しい発掘調査報告書を作成する予定です。
6. 本書の図面作成は宮本・江川がおこないました。
7. 調査にいたる経緯は飯塚康行（松江市教育委員会）が執筆し、一部江川が加筆しました。それ以外の執筆および編集は江川がおこないました。

目 次

調査にいたる経緯と経過	1
遺跡の位置図	2
Ⅰ. 岩汐峠遺跡	3
Ⅱ. 米坂遺跡	6
Ⅲ. 運倉横穴墓群	9
さいごに	17



文化財愛護シンボルマークとは……

このマークは昭和41年5月26日に文化財保護委員会（現文化庁）が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

その意味するところは、左右にひろげた両手の掌が、日本建築の重要な要素である斗供、すなわち斗と供の組み合わせによって全体で軒を支える腕木の役をなす組物のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財というみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していこうというものです。



文化財愛護
シンボルマーク

I 調査に至る経緯と経過

高知県松江農林振興センターでは、昭和59年度に「大井2期地区農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業」を計画しました。これに伴って、松江市教育委員会が昭和60年度に埋蔵文化財の分布調査を実施したところ、2箇所で古墳時代の須恵器の破片が採集され、遺跡の存在が推定されたことから、それぞれ「岩沙遺跡」、「岩沙峠遺跡」と命名されました。

その後の協議の結果、遺跡の現状保存が困難であることから、平成2年度の試掘調査を経て、平成4年度に「岩沙遺跡」、平成5年度に「岩沙峠遺跡」の発掘調査を行うこととなりました。

松江市教育委員会が発掘調査を行った結果、「岩沙遺跡」では古墳時代の須恵器、土師器をはじめ、古代の瓦、近世の古銭などが発見されました。また、須恵器窯跡の存在を示す窯体片、炭、焼土塊、二次的に焼けた須恵器片も発見されましたが、明らかな遺構は発見されず、また、土層の観察の結果、出土遺物はいずれも南側の丘陵から流れ込む形で出土していることが分かったので、「岩沙遺跡」は南側丘陵地に存在する須恵器の窯跡から流れ込んだ遺物が堆積した遺跡であることが分かりました。

「岩沙峠遺跡」は、財団法人松江市教育文化振興事業団が発掘調査を実施しました。内容については本文の中で紹介します。

一方、高知県松江農林振興センターでは、昭和61年度に大井農道から北西に続く新たな農道として「西尾地区農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業」を計画しました。これに伴って、松江市教育委員会が昭和61～62年度、平成2年度において分布調査及び試掘調査をおこなった結果、古墳群、横穴群、散布地など、合計7箇所の遺跡が発見され、それぞれ「藤谷A遺跡」、「藤谷B遺跡」、「安蔵主遺跡」、「米坂遺跡」、「運倉横穴群」、「米坂古墳群」、「柴尾遺跡」と命名されました。

その後の協議の結果、遺跡の現状保存が困難であることから、工事着工前に発掘調査を実施することとなり、平成2年度の「藤谷A・B遺跡」の調査を始めとして、平成9年度までの予定で発掘調査を実施中です。

これまでに松江市教育委員会が発掘調査を終えた遺跡について概要を述べると、平成2年度の「藤谷A・B遺跡」では古墳時代の須恵器破片が採集されましたが、明らかな遺構は発見されませんでした。

平成4年度の「安蔵主遺跡」ではトレンチ2本による調査の結果、須恵器、土師器、陶磁器類の破片を発見しましたが、明らかな遺構は発見されず、また、土層観察の結果、出土遺物はいずれも北西側の丘陵から流れ込む形で出土していることが分かったので、「安蔵主遺跡」は北西側丘陵地に存在が推定される住居跡等の遺跡から流れ込んだ遺物が堆積した遺跡であることが分かりました。

「米坂遺跡」、「運倉横穴群」は、財団法人松江市教育文化振興事業団が発掘調査を実施しました。内容については本文の中で紹介します。

なお、「運倉横穴群」は平成2年度の分布調査で南向きの丘陵斜面から古墳時代後期の須恵器が多

数採集され、その後の試掘調査及び電気探査によって、約16基の横穴墓が存在することが明らかとなったものです。その後鳥根県松江農林振興センターとの協議の結果、工事の設計変更がなされ、斜面の上半分の区域については現状保存することとし、下半分の区域について平成7年度において発掘調査を実施することとなりました。また、調査を終えた1号横穴墓、2号横穴墓については、さらに工事の設計変更をし、遺構が保存されることとなりました。

II 遺跡の位置図

大井・西尾農道関係で発掘調査を実施した、または実施する予定のある遺跡の位置は下図のとうりです。 (縮尺 1/50000)



- 1: 柴尾遺跡 (実施予定) 2: 米坂古墳群 (実施予定) 3: 米坂遺跡 4: 安蔵主遺跡
 5: 藤谷A遺跡 6: 藤谷B遺跡 7: 湫倉横穴墓群 8: 岩沙峠遺跡 9: 岩沙遺跡 (10: 出雲国庁跡)

Ⅲ 岩汐峠遺跡

大井町と朝酌町の町界にあたる岩汐峠の峠頂地点において、やや北寄りの緩やかな傾斜地から一字一石経塚が1カ所検出されました。一字一石経塚とは、仏教の教典を一石につき一文字づつ書写して一カ所に納めたもので、その意味あいには純粋な信仰にもとづくものから自己の現世利益を願うものまで多様であったようです。

岩汐峠遺跡の経塚は、大きくて角張った山石を四角形にならべ、その内側に丸みを帯びた2~6cm程度の小石を敷き詰めたものでした。規模は一辺約5mで、小石を敷き詰めた内法は一辺約2.5m、小石の敷き詰められた深さは10cm~20cmありました。墨で経文が書かれた小石は大量に出土した小石の極一部で、墨書石の大部分は1個の石に1文字を書いたものでした。現時点では書写された教典の種類はわかっていません。一字一石のほかには、梵字を文頭において複数の文字が書かれたものも5個出しました。墨の色が薄れていて判読が困難ですが、「身法界万霊」、「次松古林(善)」、「●●●乃母●●●(善)」と読めるものがあり、人名が確認できることから、この経塚の性格は祖先供養・追善供養の類ではないかと思われまます。

小石の間からは土師質土器や古銭も出土しました。土師質土器は坏2点と皿1点の合計3点です。古銭は7個出土しましたが、「聖宋元寶」「元豊通寶」などいずれも中国(北宋)からの渡来銭に限られました。

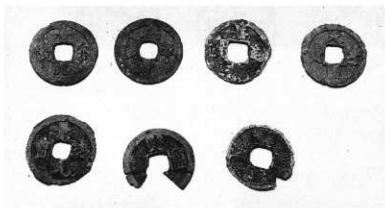
この経塚が造営された明確な時期についてはわかっていません。一字一石経塚が全国的に大流行するのは近世に入ってからのことですが、岩汐峠遺跡の一字一石経塚は、古銭の中に「寛永通寶」¹⁾がみられなかったことや、土師質土器の皿、坏の形状からおおまかに判断すると、江戸時代以前(15世紀前後か)の造営ではないかと推察されます。



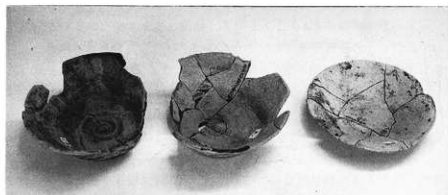
一字一石経塚全景
(南から撮影)

岩汐峠遺跡は峠頂を中心にかなりの広範囲について発掘調査をおこないましたが、経塚以外は、昭和にはいつてからの小炭焼きの土壌が検出されたほか、8世紀前後の須恵器が数点出土した程度で、大井朝酌をむすぶ古道やその他の遺構は確認できませんでした。

注1) 1636年に初鑄され、全国的に広く流通したものです。



古 銭



土師質土器

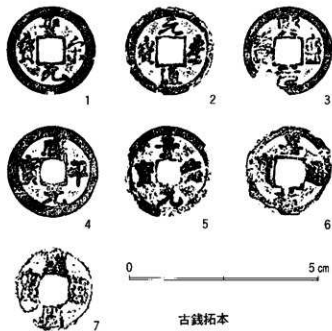


経石 (法界万壺)



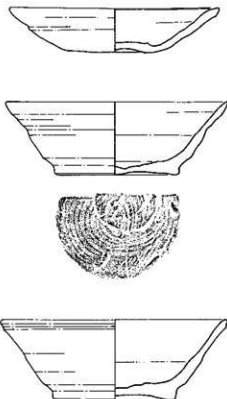
経石 (一字一石)

岩汐峠遺跡出土遺物写真

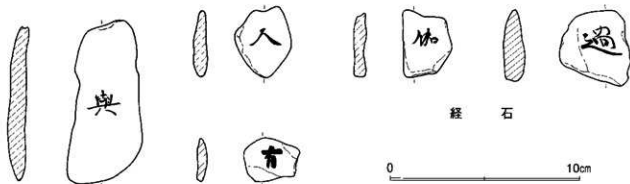
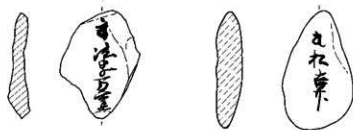


古錢拓本

1. 聖宋元寶 2. 元豐通寶 3. 熙寧元寶 4. 咸平元寶
5. 景德元寶 6. 嘉祐通寶 7. 〇〇通寶



土師質土器



經石

一字一石經塚出土遺物実測図

II 米坂遺跡

米坂遺跡は和久羅山麓の微高地にあります。発掘調査をおこなう直前まではうっそうとした竹藪でしたが、10年くらい前までは茶畑や大根畑として利用されていたようです。表土から地山までが比較的浅い場所でも長期間にわたって深く耕作されていたため、表土中には土師器のきわめて小さなかけらが無数に混じっていました。

米坂遺跡からの出土品は大部分が古墳時代後期前葉のもので、地山直上に粘土を用いた作り付けのカマド（約半分は耕作のためか欠損）が検出されたり、持ち運び式のカマドの一部が出土したことから、当時の住居跡であったことがわかりました。

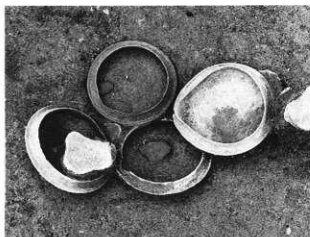
さて、米坂遺跡の住居跡は掘立柱建物で、これは現在のように基礎の上に柱を建てるのではなく、直接地面に穴を掘って柱を埋めて固定する方法で造られたものです。したがって、発掘調査では地面に柱穴の跡を探し、そのならばから当時の建物を復原する作業をおこないます。しかし、もともと簡易的な建て方がしてあったり、耕作をはじめとする後世の削平を受けたりして何棟の建物が存在していたのか判然としない場合も多々あります。米坂遺跡もこの類で、明瞭な建物の復原はできませんでした。しかし、東側半分の範囲については、排水溝から判断して少なくとも4棟の建物が建っていたと考えられ、その範囲は調査区の北側へとさらに広がっているようです。原位置をたもった遺物はほとんど無く、次の頁に写真を載せた坏4点程度でした。これらは地山を浅く掘りこんだ土壌内に置かれていたために耕作の難をのがれたようです。

調査区西側半分についても、耕作のほか和久羅山からの土石流の痕跡が顕著で、遺構・遺物とも非常に残りが悪い状態でした。土器以外の出土遺物としては包含層中から水晶製の玉1点が出土しました。

古墳時代以外の遺物としては分銅形石器や石鏃5点が出土したほか、石器の材料となる黒曜石の剥片多数が出土しました。縄文時代にもこの地で人間の活動がおこなわれていたことがうかがえます。



米坂遺跡東半分
遺構検出状況
(東から撮影)



坏出土状況



持ち運び式カマド出土状況



須恵器（坏の蓋）



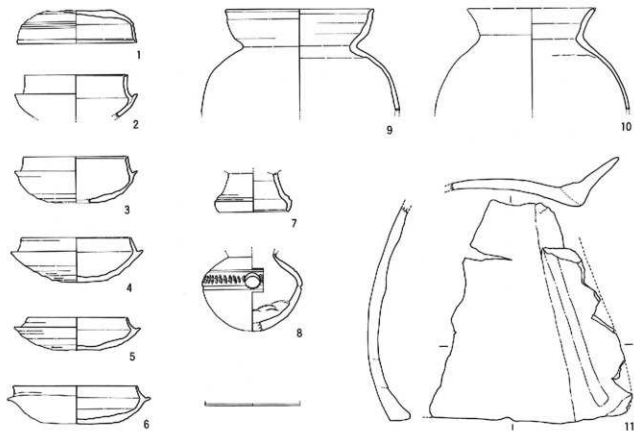
須恵器（はそう）



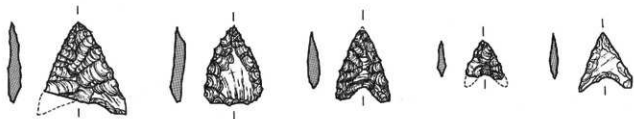
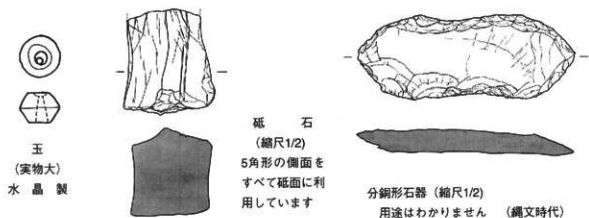
土師器（カメ）

持ち運び式カマド

米坂遺跡出土遺物写真



1は須恵器の蓋、2～6は環、7は高環の脚、8は足の胴部です。9・10は土師器のカメの上半分、11は持ち運び式のカマドの一部分（左側下半分）です。



石鏃(実物大) 1～4は黒曜石、5のみ安山岩系の石材でつくられています(縄文時代)

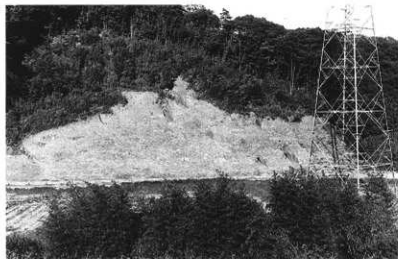
Ⅲ 遅倉横穴墓群

遅倉横穴墓群は朝酌町集落の北の急斜面にありました。

横穴墓とは出雲地方では古墳時代後期に爆発的に流行する墓の形態の一種で、山斜面に直接トンネル状に穴を掘り、奥に遺体を安置する玄室と呼ぶ部屋をつくったものです。遺体を安置した後は、入り口を木製の板や石を用いて閉塞してしましますが、必要に応じて入り口を開け、追葬や祭祀をおこなうことも多かったようです。単独で造られる場合もありますが、群をなして造られる場合が多いようです。次頁の写真で、横穴墓調査について簡単に紹介したいと思います。

さて、朝酌地区では土質が横穴墓造営に適さず、これまで周知の横穴墓はありませんでしたが、今回の遅倉横穴墓群発掘調査で初めて5穴が確認できました。遅倉横穴墓群の特徴としては、遺体を安置した屍床はすべて須恵器甕の碎片が敷かれたもので（須恵器床）、大量の須恵器の副葬がみられたこと、出雲地方で最も古いと考えられているタイプの横穴墓があり、それから長期間にわたって横穴墓造営がおこなわれたこと、土質が悪くいずれも天井の崩落が著しく、遺構の残りが非常に悪かったことがあげられます。個々の横穴墓についてはまた後でふれることとします。

今回は斜面下半の5穴について調査をおこないましたが、同斜面上方の調査範囲外にも、横穴墓特有の馬蹄形凹地や黒色土があり、埋もれている横穴墓数はまだまだ多いものと思われます。



遅倉横穴墓群全景（南から撮影）

（左下）

1号横穴墓（左）と2号横穴墓（右）

（右下）

3号横穴墓（左）と4号横穴墓（中）
と5号横穴墓（右）





1. 堅い岩盤にアーチ状に土が入り込み、横穴墓の入り口が確認できます。



4. 玄室に入ると右側に須恵器床があり、蓋坏が副葬されていました。



2. 入り口の前面を掘ると、墓道・閉塞石が検出され、たくさんのお供え遺物が出土しました。



5. 遺物を取り上げると、排水溝や屍床（遺体を安置した場所）の形状がよくわかります。



3. 閉塞石を取り除くと、玄室につながる狭道にもカメラが供養されていました。



6. 調査終了後です。言い換えれば、横穴墓が造られた一番最初の段階です。

5号横穴墓の発掘調査

◆1号横穴墓

墓道は断面がU字形で細長く、玄室は不整形な楕円形に造られていました。玄室の天井は大規模に崩落していましたが、おそらく低い丸天井でしょう。このタイプの横穴墓は出雲地方では最も早い時期の横穴墓とされており、副葬された須恵器の形態も6世紀後半前葉のものでそのことを裏付けています。遺体を置いた屍床は玄室の左側だけで、副葬品は須恵器のほか、鉄鏡片が3片出土しました。閉塞石は地山の中に含まれる軟質の石を利用していました。人骨は残っていませんでした。

◆2号横穴墓

墓道は長く前方に開き、玄室は縦方向に長い長方形で、天井は比較的高い妻入りのテント形でした。玄室内の屍床からは、須恵器床にしては大きめの甕片が2~3重に重なりあうように出土しました。これらのすべてが須恵器床を構成しているとは考えられず、遺体の上にも須恵器破片を置いていたかもしれないし、一部が壁に立てかけてあったことから周囲の壁に須恵器片を立てかけて装飾していた可能性も考えられます。副葬された須恵器の形態をみると、7世紀前半のものが多く、今回調査をおこなった横穴墓の中では一番新しい造営と考えられます。副葬品は須恵器のほか、刀子2点、金メッキの耳環2点が出土しました。若い女性の骨も一部残っていました(鳥取大学医学部、井上貴央先生鑑定による)。閉塞施設は板材で、それを固定するための大きな石を別の場所から運んできていました。

◆3号横穴墓

ほかの4穴に比べるととても小さいという印象を受けます。玄室は不整形で最大長1.4m、天井は最高部で0.8mというきわめて低い丸天井です。須恵器床は玄室の右側のみに造られており、左側には上下逆転した坏1点と甕片1片が置かれていました。この坏は枕として利用されていたのかもしれませんが。閉塞施設は板材が使用されたと思われるが、入り口の高さまで石が積みあげてありました。人骨は残っていませんでした。

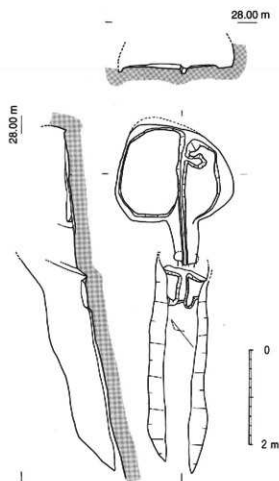
◆4号横穴墓

墓道はやや広く平坦ですが、玄室の形は不整形、天井は低い丸天井で1号横穴墓によく似ており、左側の屍床はともて丁寧に造ってありました。この横穴墓は墓道からたくさんの須恵器が出土しました。中でも提瓶と呼ばれる水筒状の器種の割合が高いようです。閉塞施設は平板を石で固定させたものですが、板材が腐った段階で積まれていた多量の石が羨道内になだれ込んだようです。それらの石を取り除くと、玄室から続いている排水溝上に大きめの須恵器破片が溝蓋状に並べてありました。横穴墓を造った人々の心使いが垣間みられます。人骨は残っていませんでした。

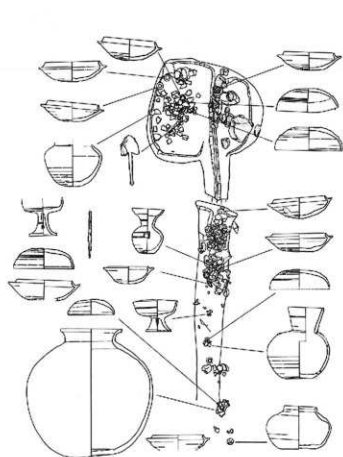
◆5号横穴墓

墓道も羨道も玄室も幅の広い造りです。玄室の形はほぼ正方形で、天井は平天井に近いものでした。閉塞施設は平板を石で固定させたものですが、石はかなり散乱した状態で出土しました。この横穴墓で特記することは、玄室の入り口よりやや手前の羨道上に鉄製の太刀2本と刀子が置かれていたことでしょう。須恵器以外の副葬品がきわめて少ない他の4穴に比べると特異な存在です。1本の太刀は完全な形で、楕円形の鐔や目釘も残っていました。これらの鉄製品は床面直上に置かれており、何らかの意味を持って意図的に置かれたものと思われます。人骨は残っていませんでした。

◆1号横穴墓



遺構図



遺物出土状況図



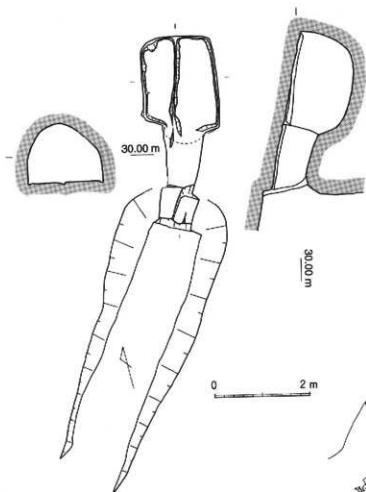
鉄器



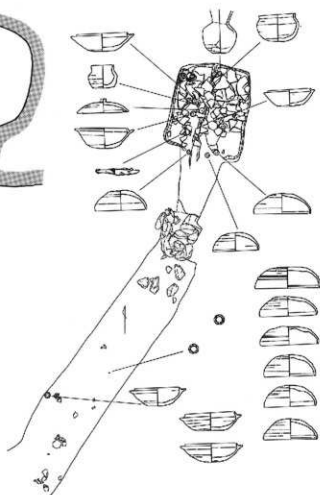
須恵器

出土遺物写真

◆2号横穴墓



遺構図



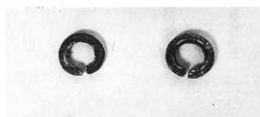
遺物出土状況図



須恵器



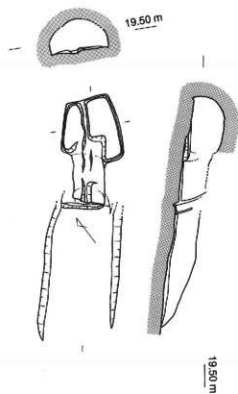
刀子



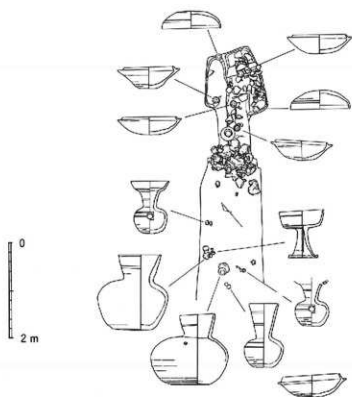
耳環

出土遺物写真

◆3号横穴墓



遺構図



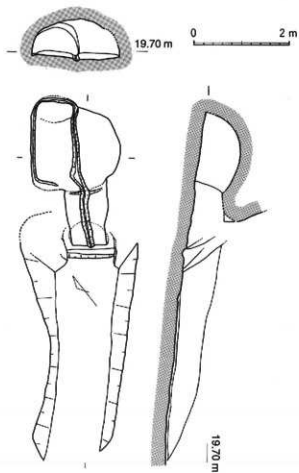
遺物出土状況図



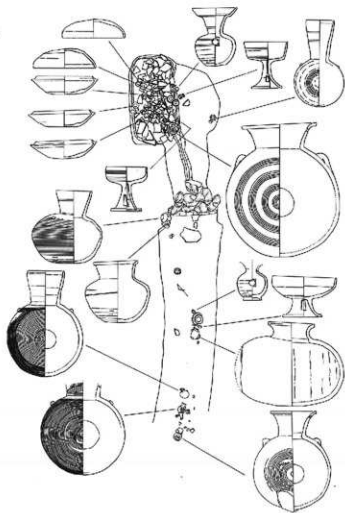
須恵器

出土遺物写真

◆4号横穴墓



遺構図



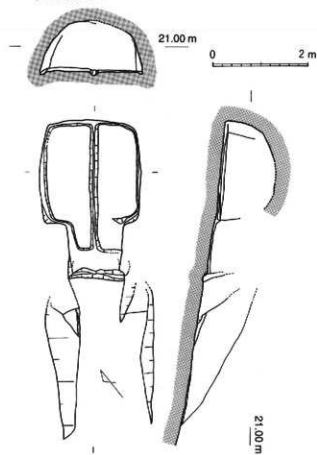
遺物出土状況図



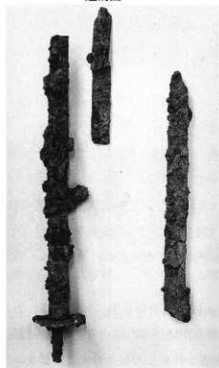
須恵器

出土遺物写真

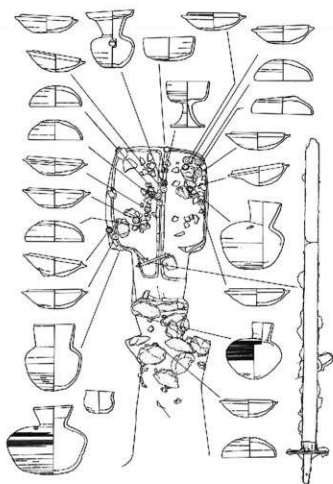
◆5号横穴墓



遺構図



太刀



遺物出土状況図

遺物出土状況図



須恵器

出土遺物写真

さいごに

大井町、朝酌町、西尾町周辺はとても遺跡の数が多いところです。

この地域はいずれも朝酌川やそれに続く中海に面した場所に位置しています。現代のように道路事情の良くなかった過去においては、とりわけ松江市のような水郷地域においては水上交通が重要な移動の手段であり、水辺のこれらの地域が利便な場所であったことは想像に難くありません。

また、奈良時代に編纂された「出雲国風土記」には、国庁（今の松江市大阜町）を起点とする樞北道が通っていたと記載されています。それは朝酌の渡りを経て鳥根郡家（今の松江市福原町）に続き、そこからさらに隠岐へ渡る千酌駅家に通じるもので、いわゆる官の道でした。つまり国庁のおかれていた意宇郡から鳥根郡にはいる入り口に朝酌郷があり、西尾町の中心部を横切って上東川津町方面にぬける幹線道路が通っていたのです。この官の道は律令時代にはいつから制定されたものですが、隠岐は石器の材料となる黒曜石の産地であり、先土器時代より本土との交流があったことを考えると、その土地はかなり古くからあったのではないかと推察されます。

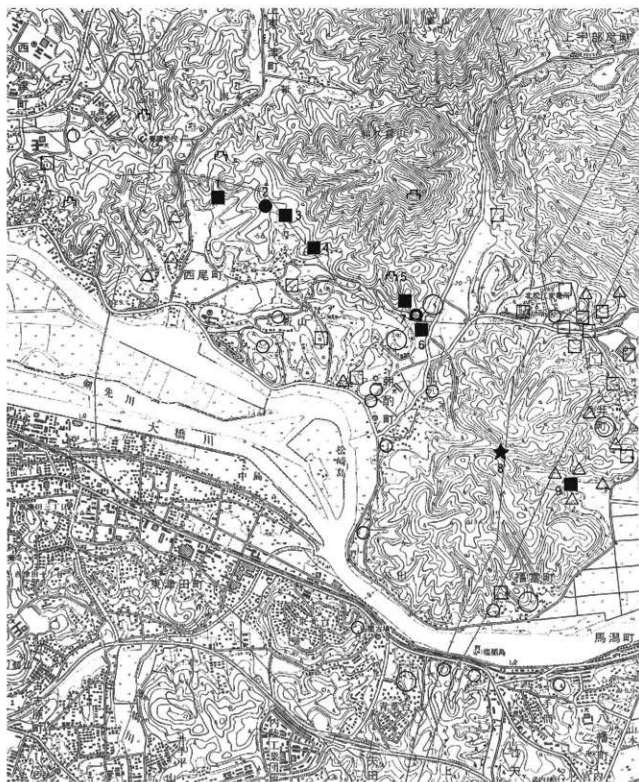
さて、大井町は「出雲国風土記」にも記載されているように、古墳時代後期から奈良時代を中心とする須恵器の一大生産地でした。たくさんの須恵器窯跡が知られており、焼き損じなどで周辺に投げ捨てられた須恵器片は現在の田畑に大量に散乱しています。それは現在では耕作する人々の頭を悩ませているほどです。須恵器生産にたずさわっていたと思われる人々の住居跡、古墳も多数分布しています。また、朝酌町では朝酌川沿いに全長70mという巨大な魚塚古墳が造営されている一方、廻原古墳群や九日宮古墳群など石棺式石室を主体部にもつ小規模古墳の数が非常に多いことが目立ち、特に古墳時代後期においてこの地に有力者が居住していたことがうかがわれます。西尾町では、廟所古墳や観音山古墳など一辺30mの方墳が造営されています。そのほかに現時点で確認されている遺跡数は少ないのですが、なだらかな地形の広がりから考えても地下面に眠っている遺跡数は多いものと推定されます。

大井・西尾地区農道整備事業は、このような場所に一本の長い道を建設しようというものですから、文化財保護の見地に立ち、周知の遺跡をできるだけ避けるように配慮して設計されています。また、松江市教育委員会は、農道建設予定地内について綿密な遺跡の分布調査を実施しました。地表面の状況だけでは判断しかねる場所については試掘調査も実施しました。

その結果、これまで知られていなかった遺跡が多数存在し、9カ所について発掘調査の必要な場所を確認することができました。これまでに、松江市教育委員会は4遺跡について発掘調査を終了し、財団法人松江市教育文化振興事業団では3遺跡について発掘調査を終了しています。

本書では、後者の3遺跡についてその概要を報告しました。

財団法人松江市教育文化振興事業団は、引き続き大井・西尾地区農道整備事業に関係して、あと2遺跡について発掘調査を実施する予定です。そして、すべての調査が完了した時点で、大井・西尾地区農道整備事業関係の9遺跡の発掘調査の成果についての本報告書を作成したいと考えています。



○古墳 ○古墳群 □散布地 △竈跡 ☆経塚 ⊙横穴 ◻山城

1. 柴尾遺跡 (実施予定) 2. 米坂古墳群 (実施予定) 3. 米坂遺跡 4. 安蔵主遺跡
 5. 藤谷A遺跡 6. 藤谷B遺跡 7. 運倉横穴墓群 8. 岩汐峠遺跡 9. 岩汐遺跡

周辺の遺跡分布図 (縮尺: 1/25000)

大井・西尾地区農道整備関係遺跡
発掘調査概要報告書

1996年3月

発行 松江市教育委員会
勸松江市教育文化振興事業団

印刷 有限会社 高浜印刷所